



TITLE:

パレスチナ人クリスチャンによる 解放の神学

AUTHOR(S):

役重, 善洋

CITATION:

役重, 善洋. パレスチナ人クリスチャンによる解放の神学. アジア・キリスト教・多元性 2012, 10: 111-122

ISSUE DATE:

2012-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/154767>

RIGHT:

パレスチナ人クリスチャンによる解放の神学

役 重 善 洋

1. はじめに

アウグスチヌスの正戦論からブッシュ米大統領のイラク戦争にいたるまで、キリスト教の論理やレトリックを通じた戦争・侵略行為の正当化は、歴史上、繰り返し行われてきた。とりわけ、16世紀以降のヨーロッパの領土拡大に際し、旧約聖書における「約束の地」に関する記述は、白人入植者社会を支える「創造の神話」の中に、しばしば取り込まれてきた。

この点において、シオニズム運動によるパレスチナの占領を正当化するキリスト教シオニズムの論理は、先行する移住植民地である、北アイルランドや北米大陸、南アフリ

カなどにおける入植者社会形成に際して信じられるようになった「選ばれた民」概念と同系列にあると言える。しかしながら、シオニズムの場合、旧約聖書の記述がまさに「ユダヤ人」と「パレスチナ」との関係をめぐるものであるという点、また、入植イデオロギーとしてのユダヤ人シオニズムと、それを支援するキリスト教シオニズムという二重構造になっている点においても、それまでの移住植民地イデオロギーにおける比喩的聖書解釈とは異なる性格と構造を持つ。

近年、パレスチナ人クリスチャンの中から、このキリスト教シオニズム（およびユダヤ人シオニズム）の論理に対して「解放の神学」を対置することで、抵抗しようとする動き



図1 パレスチナ周辺図

(著作者：現代企画室『占領ノート』編集班／遠山なぎ／パレスチナ情報センター)

が出てきている。本稿では、彼等がどのような論理・戦略によって「パレスチナの解放」を構想しているのか概観してみたい。

なお、本稿では、「パレスチナ」という表記が示す地理区分は、特に断りがない場合、西岸地区とガザ地区からなる 1967 年の被占領地に現イスラエル領を加えた、いわゆる「歴史的パレスチナ」を指すものとする。(図 1 を参照)

2. パレスチナのキリスト教徒

パレスチナ人クリスチャンの解放の神学について述べるには、まず、パレスチナのクリスチャンが置かれている状況について概観しておく必要がある。

解放の神学の発祥の地とされる中南米においても、その影響を大きく受けた神学が広がったアメリカ合州国の黒人社会やフィリピンにおいても、キリスト教人口が大多数を占めている。民衆神学が展開された韓国においても、それが大きく展開した 1970 年代から 80 年代は、キリスト教人口が急増した時代であり、現在人口の約 3 割を占めるに至っている。

その点、中東・パレスチナのキリスト教人口は、ローマ帝国の国教化が行われた 4 世紀末からアラブ・イスラームに「征服」される 7 世紀までは、多数派を構成していたものの、以後、人口のほとんどがイスラーム教徒となり、現在は、被占領地において約 1 %、イスラエル領内において約 1.6% (アラブ人人口の 8%) を占めるに過ぎない。しかも、彼らは、2000 年の歴史の中で、カルケドン派・非カルケドン派の分裂を始め、十字軍侵攻以降のローマ・カトリックによる影響など、主としてヨーロッパ・キリスト教世界からの政治的圧力によっていくつもの宗派に分裂、相対立してきた。(図 2 を参照) また、専制的な統治の下で、預言的な聖書の言葉は抑圧され、「神学は典礼・儀礼・祭儀の中に閉じ込められる傾向」にあった。(Ateck2008:12)

オスマン帝国下において、キリスト教各派は、一定の自治 (ミレット制度) を享受していた。しかし、とくに 19 世紀に入ると、西欧列強が、この制度に付け入るかたちで、各宗教マイノリティの保護権 (〜キャピチュレーション) を競って主張するようになり、この地域への植民地主義的介入を繰り返した。例えば、ロシアはギリシア正教徒に対する保護権を主張し、フランスはカトリックに対する保護権を主張、イギリスは、ユダヤ教コミュニティに目を付けた。これが、現在につながるパレスチナ問題の起源となった。

このように、西欧列強の中東・パレスチナへの植民地主義的進出において政治的に利用される立場にあったキリスト教徒達は、宗教の違いを超えた連帯を模索するようになり、非宗派主義にもとづくアラブ民族主義の中核となっていった。そのため、民族解放運動の文脈においてパレスチナのキリスト教徒が宗教的主張を押し出すことは、近年に至るまで全くというほど無かった。

図2 中東教会図 (中東教会協議会『中東キリスト教の歴史』より転載)

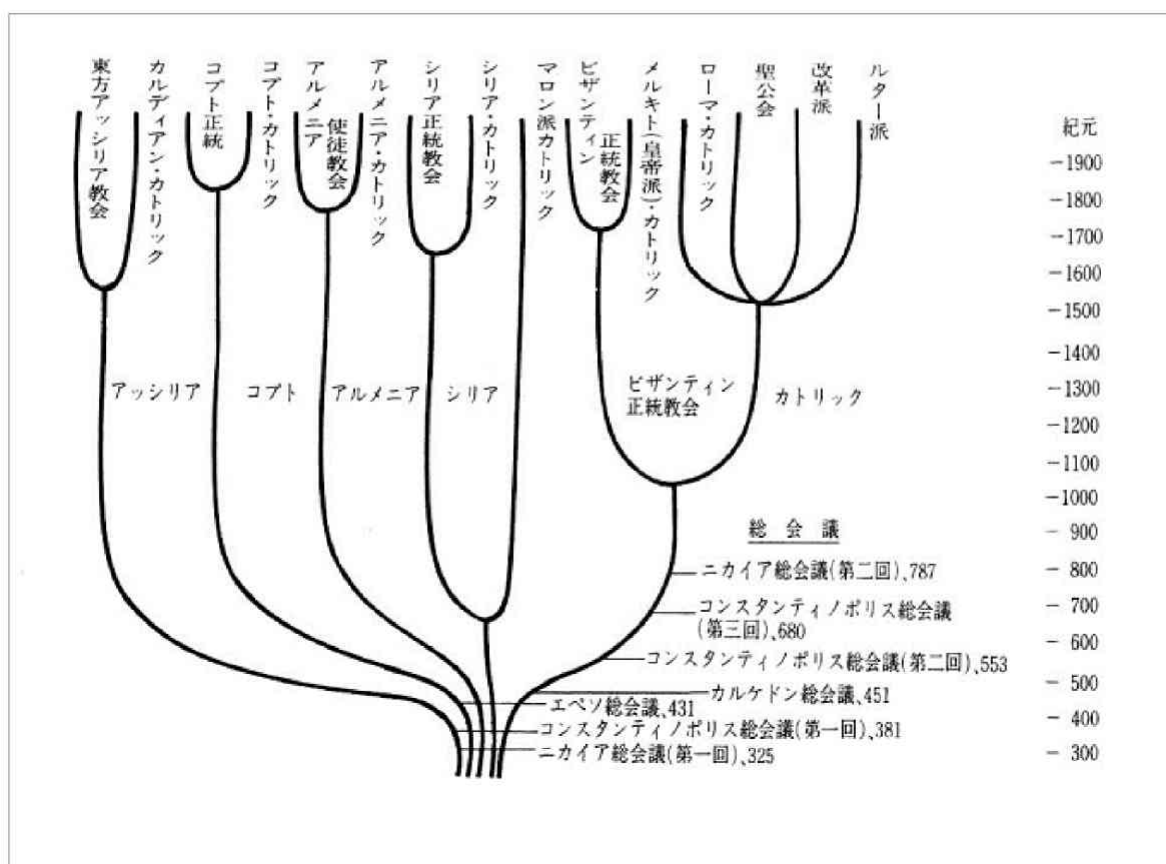


表1 パレスチナ被占領地(西岸地区とガザ地区)のキリスト教徒の人口(1994年)

教派	人口	人口比
Greek Orthodox	25835	52.0%
Latins	15168	30.5%
Greek Catholics	2848	5.7%
Protestants	2443	4.9%
Syriacs	1498	3.0%
Armenians	1500	3.0%
Copts	250	0.5%
Ethiopians	60	0.1%
Maronites	100	0.2%
Total	49702	100%

※西岸・ガザ地区の全人口 2,238,000 人の内 2.2%。現在は 1%。

※イスラエル領内のアラブ・パレスチナ人の内、キリスト教徒は 14% (125,000 人)。現在は 8%。

※歴史的パレスチナ全体におけるキリスト教徒は、全人口の 2.3% (175,000 人)。現在は約 1.3%。

※難民を含めた全パレスチナ人口の内、キリスト教徒は約 400,000 人で、約 6.5%。

Source: Ateek et al., 1997: 132-6.

3. パレスチナ解放神学の誕生

このような状況に置かれたパレスチナのキリスト教徒の中で、「解放の神学」を構築する試みが始まった直接の背景には、第一次インティファダ（1987～93）の勃発があった。パレスチナ解放神学の提唱者である、聖公会エルサレム教区のナイーム・アティーク司祭は、次のように述べている。

私は、そこ〔教会〕に集まったクリスチャン・コミュニティの人々の直接の反応を抜きにして、説教が完成することはないと感じていました。毎日曜日の礼拝後、出席した教会員の多くは、教会の小さなホールで一時間ほど、コーヒーを飲みながら、説教について議論をするようになりました。パレスチナ解放神学の種が撒かれ、育ち始めたのは、疑いなく、そのときでした。……毎週、彼らは説教の内容を咀嚼し、消化しました。彼らは、一週間の間に起きた彼等自身の経験や、その親戚・隣人の経験から、彼等自身の解釈を付け加えていったのです。彼らは、殺され、負傷し、あるいは投獄された人々について語りました。

説教、そして聖書の文句は、これら全ての経験に関係付けられるようになっていきました。（Ateek2008:8-9）

アティークのイニシアチブの下、1990年には、パレスチナ解放神学に関する最初の会議がエルサレムで開催され、パレスチナの各教派からの参加者に加え、アフリカやアジアの解放の神学に関わる神学者も交えての議論が交わされた。93年には、超教派の「サビール——パレスチナ・エキュメニカル解放神学センター」（サビールはアラビア語で、「道」あるいは「公共の泉」の意味）が設立され、以後、ほぼ2年に一度のペースで300～500人規模の国際会議をエルサレムで開催している。また、若者や女性を主体としたコミュニティ活動、ムスリムやユダヤ教徒との宗教間対話など、様々な活動を持続的に展開している。（詳細は「サビール」のHPを参照：<http://www.sabeel.org/>）

4. パレスチナ解放神学の特徴

アティークの著書や、「サビール」の会議の報告集を通じて知ることのできるパレスチナ解放神学の特徴は、この間のパレスチナ人クリスチャンの置かれている特殊な状況を如実に反映している。このことを、以下4点にわたって確認してみたい。

（1）パレスチナ人クリスチャンのアイデンティティの再確認

上記「表1」の注記でも確認できる通り、現在、パレスチナにおけるクリスチャン人口は急速に減少している。これは、占領政策が強化される中、比較的、教育程度が高く、

富裕層の多いキリスト教徒が、ムスリムよりも高い割合で、海外のアラブ人コミュニティを頼って、北米やオーストラリアなどに移住していることによる。

また、第三次中東戦争（1967 年）以降、パレスチナ問題は、「国際社会」において、より一層「宗教紛争」として表象されるようになり、ムスリムのパレスチナ人がテロリストとして表象される一方、キリスト教徒のパレスチナ人はますます不可視化されている。

こうした「ユダヤ・キリスト教文明対イスラーム文明」という二項対立的図式に対する反応として、イスラーム主義が台頭するようになってきたことも、パレスチナにおけるキリスト教徒の立場をより不安定にする要素になっていると言える。

このような状況の中、コミュニティを存続させるためにも、パレスチナのクリスチャン・コミュニティの中では、キリスト教のパレスチナにおけるルーツが強調されるなど、パレスチナ人クリスチャンとしてのアイデンティティの再確認の必要性が唱えられている。アティークラが組織した 1990 年の会議において、パレスチナ人クリスチャンのアイデンティティ問題は中心議題の一つであった。西岸地区のビールゼイト大学で教鞭を取っていたムニール・ファーシフは次のように述べている。

まず始めに、私は生まれて以来、アラブ人として、またクリスチャンとして、動きの取れない状態にされてきたと言わなければなりません。私が、「西側」の言葉で話し、そのイデオロギー（ヨーロッパ的キリスト教を含む）を表明し、自分を歪めれば、多くの人が私の言うことに耳を傾けてくれます。しかし、私が、私自身の声で、長い伝統をもつ、私の両親のような人々によって担われてきた土着のキリスト教について語るならば、多くの人が私の言葉を聞かないか、理解することができないという危険を冒すことになるのです。

……私達が直面している課題は、いかにして、私達の声が人々に聞かれるようにし、また、私達の考えと行動を明瞭なものにするかということです。(Ateek et al. 1992: 61)

こうした主張の背景には、パレスチナ人クリスチャンが、多くの教派に分断され、外国からの聖職者や資金の影響を断ち切れないという状況がある一方で、彼等自身のアイデンティティの核となるべき、神学的な共通認識が存在しないというジレンマがある。同じ会議に参加していたジリース・クーリーは、「神が一人であり、バプテスマが一つであり、私達の置かれた社会的政治的状況が同じであるならば、私達が、パレスチナのクリスチャンとして、この地域の諸教会を合同することを、一体何が妨げることができるのか？」と問いかけ、「パレスチナの教会の発展のために最も必要なことは、一つのローカルな神学、つまりパレスチナ人の神学を書くことだ」と断言している。(Ateek et al. 1992: 73)

(2) イエスの生涯をモデルとした非暴力抵抗の強調

パレスチナ問題の最大の特徴の一つは、母国から切り離されたアイデンティティをもつ入植者による移住植民地が引き起こしている問題だという点にある。このことが、パレスチナ人にとって意味することは、入植者であるイスラエル人との「共生」を否が応にも解放のヴィジョンの中に組み込まざるを得ないという点にある。実際、イスラエルと同様、白人入植者国家としてスタートしたアメリカ合州国やオーストラリア、南アフリカなどでは、先住民族や奴隷労働者の解放運動によって、様々な矛盾を抱えつつも、平等な市民権を原則とする多民族国家へと変化していく歴史を辿っている。しかし、パレスチナでは、「暴力の連鎖」と言われる悪循環のなかで、いまだ「和解」の契機は見えない。

こうした状況の中で、アティークは、1985 年に南アフリカのクリスチャンによって公表された「カイロス文書」におけるアパルトヘイト体制への非暴力抵抗の呼びかけを参照しつつ、パレスチナ問題の解決のためには「正義だけでは不十分である」として、次のように述べている。

イスラエル－パレスチナ紛争において私達が必要としていることは、最終的に、二つの民族間、そしてそれぞれの民族内部において平和と和解がもたらされるような、また、いずれかの民族あるいは双方の分断と破壊には至らないようなかたちで、正義が行使されうる方法である。(Ateck 1989:139)

こうした主張の背景には、「神の正義は、神の平和・愛・慈愛と切り離すことは出来ない」とし、パレスチナ人クリスチャンは、イエスの自己犠牲に倣い「受難の僕」としての使命を生きるべきだとする、アティークのキリスト教理解がある。

彼（キリスト）は、たとえそのために傷つき、死に至ることがあっても、従うべき道としての非暴力という、彼の考えをモデル化した。(Ateck 2008:96)

アティークらのイニシアチブは、パレスチナ社会の中の圧倒的少数者による取組であるにも関わらず、パレスチナ解放運動に対して無視することのできない影響を及ぼしている。第一次インティファダの際、イスラーム主義を掲げる武装組織ハマースの登場に刺激されるかたちで、キリスト教徒によるハマームと呼ばれる武装組織が現われたとき、アティークは、様々な教会指導者に働きかけ、その動きを封じている。(Ateck2008:9)

その一方、ガザ虐殺があった 2009 年には、「サビール」の主導によって、エルサレム

に教会をもつ 13 の教派が、非暴力の抵抗と連帯をパレスチナ内外に呼びかける「カイロス・パレスチナ」を連名で発表している。(http://www.kairospalestine.ps/)

(3) 旧約聖書の「脱シオニズム化」と預言書における「普遍的な神概念」への注目

ユダヤ人との共生という究極の目標を掲げる限り、キリスト教にとってもユダヤ教にとっても聖典である旧約聖書（あるいはヘブライ語聖書）の中に選民思想とは異なる普遍的メッセージを読み込むことは、パレスチナ解放神学にとって中心的な課題とならざるを得ない。

イスラエル国家の成立以前には、旧約聖書は、キリストへの信仰を証するキリスト教の聖書の欠かすことの出来ない要素であると考えられていた。しかしイスラエル国家の建国後、旧約聖書を主としてシオニズムの文脈において読むユダヤ教徒やキリスト教徒の解釈者が現われるようになり、それは、パレスチナ人クリスチャンにとってほとんど不快といえるほどのものとなってしまった。結果として、旧約聖書は、一般的に、聖職者の間でも平信徒の間でも使われなくなってしまった。そして、教会は、旧約聖書にまつわる両義性や疑問、矛盾——特に、20 世紀のパレスチナにおける出来事に対する直接の応用という点において——に対応できずにきた。言語化されているかどうかは別として、多くのクリスチャンにとっての根源的問題は、旧約聖書がシオニズムを支持するために利用されている状況の中、いかにしてそれは、パレスチナ人クリスチャンの経験に照らして、神の言葉であり得るのか、ということである。(Ateek 1989: 77-78)

こうした問題意識の背景には、1970 年代以降、西岸地区の入植運動を先導するようになった宗教シオニストと、この動きに連動するようにしてアメリカを中心に活発となったキリスト教シオニズムの存在がある。エルサレム基本法によって東エルサレム併合が一方的に法制化された 1980 年には、エルサレム国際キリスト教大使館 (ICEJ) が、85 年には、クリスチャン・フレンズ・オブ・イスラエル (CFI) が結成された。それぞれ、エルサレムに本部を設置しつつ、現在も、世界数 10 カ国で活動を展開し、パレスチナ占領地における入植活動への財政支援や自国政府へのロビイング活動を行っている。

上述の「カイロス・パレスチナ」では、次のような表明がなされている。

西側諸国のある神学者たちが、われわれの権利の侵害に対し聖書的かつ神学的な正当性を与えようとしていることをわれわれは知っている。その結果、彼らの解釈によれば、約束は、われわれの存在そのものを脅かすものとなっている。福音書の「良い知らせ」そのものが、われわれにとって「死の前兆」となっている。われわ

れはこれらの神学者に対し、神の言葉を全ての人々への生命の源と受け止めるようになるため、神の言葉に対する彼らの考察を深め、彼らの解釈を正すよう、求めるものである。(カイロス文書 2. 3. 3)

アティークは、旧約聖書を「脱シオニズム化」するために、預言書の中に見られる普遍的な神理解の伝統に注目し、その延長上にキリストの教えを見る。そうすることで、現代のイスラエルのあり方をユダヤ教の預言者の伝統からの逸脱として批判するのみならず、パレスチナ人クリスチャンとして、ユダヤの預言者にアイデンティファイし、そのことを通じて、偏狭な民族主義を超えた非暴力抵抗にもとづく解放運動の神学的根拠を見出している。彼は、とりわけ、預言者ヨナ（正確にはヨナ書の筆者）を最初のパレスチナ解放神学の提唱者として位置づけ、重視する。

ヨナの物語の核心は、神の民は、イスラエル〔の民〕に限定されないということである。……神は、他の「憤み深い」民に対しても気を配り、同情するのだと信じるだけでは十分ではない。神の愛、配慮、そして同情は、イスラエルにとって最も恐ろしい敵であるアッシリアにまで及ぶのである。(Ateek 2008: 74)

つまり、ヨナ書の筆者が紀元前 4 世紀において格闘していた問題は、私達パレスチナ人が、今日、紛争の中で直面している神学的問題の中心的構成要素なのである。

(Ateek 2008: 76)

従来解放の神学においては、「出エジプト」における「ユダヤ民族の解放」が、被抑圧民族の解放の原型として重要視されてきたが、パレスチナ問題においては、まさにこの「ユダヤ人解放の物語」が、占領支配の正当化に用いられてきたという現実がある。アティークのヨナ書への注目は、パレスチナ人にとっての民族解放が、排他的な「民族主義」によってでは達成が不可能なものであり、ユダヤ人の解放および彼等との共生というところまで視野に入れざるを得ないという、パレスチナ問題の構造的・歴史的な性格を反映していると言える。

(4) 聖書における土地の記述への注目

アティークは、旧約聖書がもつ民族的な排他性と包括性という二面性を指摘しつつ、第二イザヤ、エレミヤ、ヨナなどの預言書に見ることができる普遍的な神理解において、旧約聖書のもつ価値と可能性を見出す。しかし、アティークは、その価値と可能性は新約聖書の視点をもって最終的な完成を見んとする。彼は、「旧約聖書をクリスチャンの視点——あるいは人類の視点ないしパレスチナ人の視点——から読むことは、ユダヤ人の視

点、あるいは世俗的視点から読むことを排除しない」と述べ、旧約聖書解釈の多元的な可能性を認めつつ、それを「イエス・キリストのレンズ」を通して見ることの重要性を強調する。(Ateek2008:53-4)

このことの背景には、単に彼がパレスチナ人クリスチャンであるということだけではなく、創世記 28:13 における、神のヤコブに対する「あなたが伏している地を、あなたと子孫とに与えよう」(日本聖書協会口語訳聖書、以下の聖書からの引用も同じ)という約束をはじめとした「約束の地」に関する多くの記述が、パレスチナ人の苦難の根源であるイスラエルの占領政策の正当化に使われてきたという重い現実がある。とりわけ、第三次中東戦争後に一気に政治力を増した宗教シオニストによる、占領地における入植地拡大は、現在ますます原理主義的な性格を増しており、それをアメリカを中心としたキリスト教シオニストが政治的財政的に支援し続けている。旧約聖書における「約束の地」の記述は、パレスチナ人の民族的存亡に関わる極めて今日的な問題となっているのである。

例えば、アティークは、ガラテア書 3:16 における「約束は、アブラハムと彼の子孫に対してなされたのである。それは、多数をさして『子孫たちに』と言わずに、ひとりをさして『あなたの子孫とに』と言っているこれは、キリストのことである」という記述やロマ書 4:13 における「世界を相続させるとの約束が、アブラハムとその子孫とに対してなされたのは、律法によるのではなく、信仰の義によるからである」といった記述において見られる普遍的な神概念をもって、シオニストの民族主義的な聖書解釈に反駁する。

こうした「新約聖書」にもとづく神学的議論は、ユダヤ人の宗教シオニストに対する反論にはなり得なくとも、キリスト教シオニスト、あるいは、その主張に引きずられている多くの欧米社会のクリスチャンに対しては、一定の力を持ち得るだろう。実際、アティークから影響を受けた、ローズマリー・ラドフォード・リューサー、マイケル・プライアー、ステファン・サイザーといった神学者や聖職者たちによって、ヨーロッパ・キリスト教の神学が、パレスチナ問題に対して及ぼしてきた負の影響について、より精緻な議論が行われるようになりつつある。(Prior1997; 1999; Ruether2002; Sizer2004; Masalha2007)

また、ユダヤ人側からも、ベイラー大学ユダヤ学センターのマーク・エリスなどが、アティークら、パレスチナ人クリスチャンとの交流を通じ、パレスチナ解放神学に応答し得るユダヤ解放神学を追求してきていることも注目に値するであろう。

5. おわりに

以上、「サビール」のナイーム・アティークの議論を中心に、パレスチナ解放神学が取り組んでいる課題を概観してきた。そこでは、パレスチナ人クリスチャンが置かれてい

る以下のような状況が反映されていることが分かった。

- ① キリスト教徒が圧倒的マイノリティであり、しかも、多くの宗派に分断されていること
- ② 「文明の衝突」図式の中で、ますますパレスチナ人クリスチャンが不可視化されていること
- ③ 宗教的マイノリティが列強の植民地支配の道具として利用されてきたこと
- ④ 旧約聖書における「約束の地」の記述がシオニストの侵略の正当化に利用されてきたこと
- ⑤ 入植者社会が独立国家を形成してしまっている中、「ユダヤ人との共生」がパレスチナ解放の現実的条件となっていること

こうした状況は、パレスチナ人クリスチャンがパレスチナ解放運動の中に自らを位置付けようとするとき、独自の困難さを生じさせざるを得ない。そこでは、「クリスチャン」、「アラブ人」、「パレスチナ人」、場合によっては「イスラエル人」といった重層的アイデンティティを前提とした戦略が要求される。

パレスチナ人クリスチャンの置かれている苦境の深刻化が、パレスチナ解放神学の登場を促進したことはすでに確認した通りである。しかし、クリスチャンとしてのアイデンティティの強調は、パレスチナ問題の宗教紛争化にクリスチャンが巻き込まれていくリスクを伴う。

パレスチナで、歴史的に、キリスト教に基づく政党が結成されることがないのは、宗派对立の源となることを回避するためであったといえる。イギリスの占領とシオニズムに対する抵抗組織として、1918年にムスリム・クリスチャン協会が結成されたときも、両宗教の平等はもとより、もともとこの地に暮らしていたユダヤ教徒も同胞として認めるという原則を明確にしていた。(栗田 2004:159-63) 先にも述べたとおり、非宗派的なアラブ・ナショナリズムの形成において、アラブ人クリスチャンの存在が決定的な意味を持っていた。このことは、かつて PLO が、イスラエル領を含めた全パレスチナに「非宗派的民主国家」を建設するという目標を掲げていたことにもつながる。

こうした背景を考えると、他の地域における解放神学とは異なり、圧倒的マイノリティであるパレスチナ人クリスチャンの解放神学においては、キリスト教信仰と民族解放という政治課題を一元的につなげることについては慎重な立場を取らざるを得ない。この点、ハマースやイスラーム聖戦に見られる政治的イスラーム主義の方が一見ラディカルに見えるかもしれない。しかし、イスラームという宗教概念とパレスチナという民族概念をよりストレートに結びつける彼等のプログラムにおいても、パレスチナ人クリスチャンはより困難なアイデンティティ戦略を求められることにならざるを得ない。

しかしながら、こうしたパレスチナ人クリスチャンとしてのアイデンティティの「置き場の無さ」は、逆に、彼らの存在自身が、列強が押し付けてきた「文明間対立」の図

式に対する強力なアンチテーゼとなっていることをも示している。彼らが、パレスチナ解放神学の構築を通じて、ユダヤの預言者の「後継者」として自らを位置付けること、しかも、その「後継者」としての資格が全世界に開かれていると宣言することは、旧約聖書／ヘブライ語聖書を排外的民族主義の視点から読もうとするシオニズムの論理に対する根源的な批判になり得るものである。

また、現在イスラエル領とされているナザレ、パレスチナ自治区とされているベツレヘム、そして、深刻な係争地となっているエルサレムなど、全パレスチナにまたがるイエスの足跡は、彼らのアイデンティティそのものが、政治的分断に対する抵抗の基盤となることをも示していると言える。実際、パレスチナの諸教会は、イスラエル領と被占領地にまたがるパレスチナ人組織として独自の位置を占めている。

「ユダヤ国家」と「パレスチナ国家」の並立を前提とした「和平プロセス」の破綻が明らかとなっている今日、パレスチナ解放神学が直面している課題は、よりラディカルな共生のヴィジョンをこの地域にもたらす可能性につながっているように思われる。

参考文献

Ateek, Naim S., *Justice, and Only Justice: A Palestinian Theology of Liberation*. Orbis Books, 1989.

Ateek, Naim, Cedar Duaybis and Marla Schrader (ed.), *Jerusalem: What Makes for Peace!* Melisende, 1997.

Ateek, Naim and Michael Prior (ed.), *Holy Land – Hollow Jubilee: God, Justice and the Palestinians*. Melisende, 1999.

Ateek, Naim, *A Palestinian Christian Cry for Reconciliation*. Orbis, 2010.

Masalha, Nur, *The Bible and Zionism: Invented Traditions, Archaeology and Post-colonialism in Israel-Palestine*. Zed Books, 2007.

Prior, Michael, *The Bible and Colonialism: A Moral Critique*. Sheffield Academic Press, 1997.

---- *Zionism and the State of Israel*. Routledge, 1999.

Ruether, Rosemary R. and Herman J. Ruether, *The Wrath of Jonah: The Crisis of Religious Nationalism in the Israeli-Palestinian Conflict*. Fortress Press. 2002[1988].

Sizer, Stephen, *Christian Zionism: Road-map to Armagedon?* InterVarsity Press, 2004.

栗田禎子「中東における非宗派主義と政教分離主義の展開」私市正年・栗田禎子編『イス

ラーム地域の民衆運動と民主化』東京大学出版会, 2004.

中東教会協議会編, 村山盛忠・小田原緑訳『中東キリスト教の歴史』日本基督教団出版局, 1993.

ラブキン, ヤコヴ・M『トーラーの名において シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』平凡社, 2010.

(やくしげ・よしひろ 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程)